

## 福音を必要とする人間の罪の現実

パウロの手紙は、実に、筋道たてて、論理的に展開されている。ローマの信徒への手紙は、特にそうで、極めて論理的であり、説得的である。1 章 14 節以下を原文でみると、なぜなら、なぜなら、を連発して、筋道を正し、話しを順序を追って説いて行く。

「わたしは福音を恥としない」とパウロは言った。何故それを恥としないのか？ 何故なら、第 1 に、それはユダヤ人をはじめギリシャ人にも、すべて信じる者に救いを得させる神の力、神のダイナミックは恩寵の力だからである。何故なら、第 2 に、それは、このイエス・キリストの福音の中に、罪人を義とする神の義、神の救い、神の恵みが表されているからである。

そして今日の個所（18 節以下）で、パウロは第 3 の理由を述べる。何故なら、神の怒りは不義をもって真理をはばもうする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示されているからである、と（口語訳）。

パウロがここで言いたいのはこれである。何故、福音を恥としないのか？ 何故、ローマや西の果てのイスパニアにまで行って、この福音を伝えることを切望するのか？ それは、すべての人は、その罪のために神の怒りの下に置かれており、したがって、すべての人は、イエス・キリストにおける罪の贖いと赦しの福音を絶対に必要としているからである、と。

パウロは 18～32 節において、執拗なほど人間の罪の姿を描く。スイスの偉大な神学者カール・バルトは、かの有名な『ローマ書注解』で、この部分に『夜』という題をつけた。神を神とも思わず、神の真理をねじ曲げてはばからない人間の知性の傲慢と墮落、忌まわしい偶像礼拝、性の歪曲と極端な紊乱（びんらん）、あらゆる種類の道徳的罪の氾濫。

ここに描かれているのは、まさに、バルトが言うように、神から離れた人間の「夜の状況」である。そして、それは二千年前のローマの世界の状況であるとともに、今日の世界の状況ではないか！それは、まさに今日の人間の現実でもある。神から離れた罪人としての人間の姿である。イエス・キリストの福音を絶対に必要としている人間の罪の現実である。

罪とは神への反抗である。神を神として認めようとしなない人間の傲慢である。人類の歴史は、まさに、このような神を神として崇めようとしなないアダムの罪の歴史であった。そして、人間が、神を神として崇めず、感謝もせずむしろ神からの独立を主張して反抗したとき、その結果、人間に何が起きたか？ パウロは、ここで人間のみじめな罪の現実を語るのだからである。

人は例外なしに、神の前に罪を負った存在である。私たちは皆、罪の故に神の怒りの下にある。裁きの下にある。断罪の下にある。どうしたら人間は救われるのか。私たち自身には、この神の怒りをなだめ、神の裁きを取り除き、神の断罪を退ける資格も力もない。それが出来るのは、福音において啓示されたキリストの救い、十字架の血による罪の贖い以外にない。

キリストは救い主としてこの世に来られた。十字架の上で、人間の罪に対する神の怒りと裁きをその身に引き受けられ、死んでくださった。キリストの死は、私たちの罪の贖いの死であり、身代わりの死であり、赦しの死であった。これを信じ受け入れるとき、人は神の前に義とされ、救われるのである。これがキリストの福音のメッセージである。